男女共同参画推進連携会議　企画委員会　議事概要

1. 日　時　：　平成２９年６月６日（火）１５時～１７時
2. 場　所　：　中央合同庁舎８号館８階特別中会議室
3. 議　題　：
(1)最近の男女共同参画の動きについて
(2)男女共同参画推進連携会議の取組状況について
(3)パンフレット「ひとりひとりが幸せな社会のために」の改訂について
(4) 国・地方連携会議ネットワークを活用した男女共同参画推進事業の採択について
(5)男女共同参画推進連携会議の今後の活動について
(6)その他

4. 出席者　：
（有識者議員）
室伏議員、天野議員、飯田議員、石井議員、石川議員、犬塚議員、大崎議員、上林議員、徳倉議員、林議員、山屋議員
（事務局）
武川 内閣府男女共同参画局長、岡本　内閣府大臣官房審議官（男女共同参画局担当）、岡田 内閣府男女共同参画局総務課長、石橋　内閣府男女共同参画局男女共同参画推進官、大川内 内閣府男女共同参画局政策企画調査官

5. 議事概要
（最近の男女共同参画の取組について）
資料１に基づき、内閣府岡田総務課長より報告があった。
委員からの主な意見は以下のとおり。
・女性活躍加速のための重点方針 2017 に「男性の暮らし方・意識の変革」について記載があったが、学生など若い男性の育児等に対する意識は変わってきており、世代間で暮らし方や働き方に関する捉え方が違うと感じる。特に男性管理職の働き方改革の取組強化を望む。また、家事・育児などの「暮らし方」改革とともに「働き方」改革を一体化して取り組むべきである。
⇒男性の暮らし方・意識の変革に関する専門調査会が開催されていた時期には、働き方改革実現会議が開催されていた。調査会では暮らし方改革と働き方改革は表裏一体で進めていくべきであると議論されていた。今後、重点方針 2017 に記載した事項を実際に取り組んでいく中で、検討していきたい。
・平成 28 年世論調査によると、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という固定的な性別役割分担意識について、全体としては反対が 5 割を超えているが、男性に限ると 5 割に満たない状況である。男性の意識変革を今後とも進めていただきたい。

（男女共同参画推進連携会議及びチーム活動の報告について）
資料 2-1 に基づき、室伏議長より連携会議全体の活動について報告後、資料 2-2～2-4 に基づき、石川議員、徳倉議員、飯田議員より各チームの活動状況について報告があった。

（パンフレット「ひとりひとりが幸せな社会のために」の改訂について）

事務局より資料 3-1～3-2 を説明後、意見交換を行った。

委員からの主な意見は以下のとおり。

・育児休業を取得して就業を継続する女性の割合が増加傾向にあると記載があるが、増加した要因についても追記すべきである。

・直近５年くらいにおいて、APEC や G7、G20 などもジェンダーの視点や女性の経済的エンパワーメントについて取り上げているため、パンフレットにおいて、国連以外の国際的な動きについても発出できたらよいと思う。

⇒来年度はデザインも含めて改定の予定であり、掲載を検討する。

・白黒で印刷した場合でもデータ等が見やすいようにしてほしい。

・配布先について、大学だけでなく、小学校、中学校、高校や福祉関係者も含めてほしい。

・GGI（ジェンダー・ギャップ指数）が掲載されているが、今後は、他の団体が算出している指数も比較のために掲載するべきである。

⇒来年度のパンフレットにおいて、掲載を検討する。

上記の意見も踏まえつつ、引き続き、内閣府にてパンフレット作成を進めることとした。

（国・地方連携会議ネットワークを活用した男女共同参画推進事業の採択について）

事務局より資料 4-1～4-3、共催団体企画案一覧を説明後、今年度実施の共催事業について審査を行った。委員の意見を踏まえ、議長と事務局にて、後日、採択案件を決定することとした。

（男女共同参画推進連携会議の今後の活動について）

事務局より資料５を説明後、意見交換を行った。委員からの主な意見は以下のとおり。

・これまでチームごとで活動していたが、次世代への働きかけチームと経済分野における女性の活躍促進チームとでは、対象者の意識と現状のギャップが大きいため、２つのチームを合同で取り組む企画も検討すべきである。

・女性活躍加速のための重点方針 2017 で掲げている「女性の活躍を支える安全・安心な暮らしの実現」及び「女性活躍のための基盤整備」についての視点もチーム活動の中に取り入れてほしい。

・看護界においては、男性の看護師は少数派であり、男性の参画に取り組んでいるところであるが、こちらも男女共同参画の取組になるか。

⇒男女共同参画の取組となる。全国男性看護師会という組織もあり、男性看護師の価値を見出す取組を行っており、日本看護協会においても支援をしている。

・前回の次世代への働きかけチームにおいては、若い人たちの発言を聞くことができとてもよかった。今後とも、オブザーバー等で継続的に参画してもらいたい。

以　上